

報告者について

氏名(所属専攻・職名)	日高 薫 (日本歴史研究専攻・教授)
略歴	<p>学歴</p> <p>東京大学文学部第二類(史学)美術史学科 【1985年卒業】</p> <p>東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻博士課程 【1990年単位取得退学】</p> <p>博士(文学)【2008年・東京大学】</p> <p>職歴</p> <p>1988年 杉野女子大学非常勤講師</p> <p>1989年 東京大学文学部美術史研究室助手</p> <p>1992年 共立女子大学国際文化部日本文化研究助手</p> <p>1994年 国立歴史民俗博物館情報資料研究部助手</p> <p>2002年 国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授</p> <p>2007年 国立歴史民俗博物館情報資料研究部准教授</p> <p>2008年 総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻准教授併任</p> <p>2010年 国立歴史民俗博物館研究部教授</p>
専門分野	漆工芸史
現在の研究テーマ	<p>蒔絵を中心とする漆工芸史</p> <p>交易品としての漆器をめぐる文化交流に関する研究</p>

報告内容について

題名	交易品を美術史からみる
概要	<p>日本の特産品の代表として、古代・中世には東アジア諸国へ、近世には西洋へ向けて輸出された漆器を通じて、美術における交流・混淆とアイデンティティの問題を考える。</p> <p>海外において最も人気を集めた蒔絵漆器は、日本もしくは東洋の象徴とみなされ、日本イメージの形成に少なからず関与した。交易工芸品としての漆器には、「日本らしさ」が求められたのである。しかし、これら「他者」のための美術には、注文者である他者からの直接的な働きかけの成果や、制作者の他者への意識・配慮等が反映されており、日本国内向けの製品とは異なる要素が混入している。交易品の中に見え隠れする日本と世界との関係を、美術史的にとらえてみたい。</p>

